第 30 回ユニバーシアード競技大会（2019/ ナポリ）を振り返って

前村公彦 *

Looking back at the 30th Universiade in Napoli 2019

MAEMURA Hirohiko *

１．はじめに

第 30 回ユニバーシアード競技大会はイタリア・ナポリにて 2019 年 7 月 2 日～ 14 日まで開催された（陸上競技は 7 月 7 日～ 12 日）。陸上競技における日本選手団は男子 25 名、女子 16 名、および役員 14 名を加え、総勢 55 名の選手団で参加した（表 1 および 2）。本報告では、筆者が主にコーチングを担当した陸上競技における短距離・障害種目の戦いを中心に振り返ってみたい。

２．移動スケジュール

渡航は 2 回に分けて実施された。第 1 陣は 7 月 3 日に新高輪プリンスホテルにおいて実施された陸上競技結団式後の夜に出発し、第 2 陣は翌日早朝にホテルを出発、いずれも新東京国際空港羽田からの渡航であった。羽田から、第 1 陣はフランクフルト空港を経由、第 2 陣はシャルルドゴール空港を経由し、ナポリ空港へと移動した。乗り継ぎの都合上、トランジットに 4 時間強を費やした上、第 2 陣の選手村到着は現地時間の午前 1 時過ぎとなり、肉体的および精神的に大きなストレスの伴う移動であった。

また、通常の移動に加え、今大会では男子棒高跳

表 1　第 30 回ユニバーシアード競技大会（2019/ ナポリ）日本代表役員

役職	氏名	フリガナ	所属
チームリーダー	栗山　佳也	クリヤマ　ヨシナリ	大阪体育大学
監督	安井　年文	ヤスイ　トシフミ	青山学院大学
総務	米田　勝朗	ヨネダ　カツロウ	名城大学
コーチ	青木　和浩	アオキ　カズヒロ	順天堂大学
コーチ	大後　栄治	ダイゴ　エイジ	神奈川大学
コーチ	酒井　俊幸	サカイ　トシユキ	東洋大学
コーチ	森長　正樹	モリナガ　マサキ	日本大学
コーチ	前村　公彦	マエムラ　ヒロヒコ	筑波大学
コーチ	佐々木　大志	ササキ　ダイシ	東京女子体育大学
コーチ	井上　悟	イノウエ　サトル	近畿大学
ドクター	金子　晴香	カネコ　ハルカ	順天堂医院
トレーナー	眞鍋　芳明	マナベ　ヨシアキ	中京大学
トレーナー	矢嶋　友美	ヤジマ　トモミ	T.S Serve Trainer Team
トレーナー	小坂　拓	コサカ　タク	株式会社　ケッズトレーナー

表 2　第 30 回ユニバーシアード競技大会（2019/ ナポリ）日本代表選手

性別	種目	氏名	フリガナ	所属
男子	短距離	宮本　大輔	ミヤモト　ダイスケ	東洋大学
	短距離	デーデー ブルーノ	デーデー　ブルーノ	東海大学
	短距離	染谷　佳大	ソメヤ　ヨシヒロ	中央大学
	短距離	山下　潤	ヤマシタ　ジュン	筑波大学
	短距離	河内　光起	カワウチ　ミツキ	近畿大学
	短距離	北谷　直輝	キタダニ　ナオキ	東海大学
	中長距離	館澤　亨次	タテザワ　リョウジ	東海大学
	中長距離	西山　和弥	ニシヤマ　カズヤ	東洋大学
	中長距離	阿部　弘輝	アベ　ヒロキ	明治大学
	中長距離	相澤　晃	アイザワ　アキラ	東洋大学
	中長距離	中村　大聖	ナカムラ　タイセイ	駒澤大学
	中長距離	伊藤　達彦	イトウ　タツヒコ	東京国際大学
	競歩	川野　将虎	カワノ　マサトラ	東洋大学
	競歩	池田　向希	イケダ　コウキ	東洋大学
	競歩	古賀　友太	コガ　ユウタ	明治大学
	障害	泉谷　駿介	イズミヤ　シュンスケ	順天堂大学
	障害	豊田　将樹	トヨダ　マサキ	法政大学
	障害	井上　駆	イノウエ　カケル	順天堂大学
	障害	阪口　竜平	サカグチ　リョウヘイ	東海大学
	跳躍	橋岡　優輝	ハシオカ　ユウキ	日本大学
	跳躍	津波　響樹	ツハ　ヒビキ	東洋大学
	跳躍	江島　雅紀	エジマ　マサキ	日本大学
	跳躍	竹川　倖生	タケカワ　コウセイ	法政大学
	投擲	坂本　達哉	サカモト　タツヤ	大阪体育大学
	投擲	長沼　元	ナガヌマ　ゲン	国士舘大学
女子	短距離	湯浅　佳那子	ユアサ　カナコ	日本体育大学
	短距離	福田　真衣	フクダ　マイ	日本体育大学
	短距離	柳谷　朋美	ヤナギヤ　トモミ	大阪成蹊大学
	短距離	広沢　真愛	ヒロサワ　マエ	日本体育大学
	中長距離	塩見　綾乃	シオミ　アヤノ	立命館大学
	中長距離	和田　有菜	ワダ　ユナ	名城大学
	中長距離	髙松　智美ムセンビ	タカマツ　トモミムセンビ	名城大学
	中長距離	五島　莉乃	ゴシマ　リノ	中央大学
	中長距離	関谷　夏希	セキヤ　ナツキ	大東文化大学
	中長距離	鈴木　優花	スズキ　ユウカ	大東文化大学
	中長距離	加世田　梨花	カセダ　リカ	名城大学
	中長距離	田川　友貴	タガワ　ユキ	松山大学
	跳躍	髙良　彩花	コウラ　アヤカ	筑波大学
	投擲	郡　菜々佳	コオリ　ナナカ	九州共立大学
	投擲	齋藤　真希	サイトウ　マキ	東京女子体育大学
	投擲	北口　榛花	キタグチ　ハルカ	日本大学

*　筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

びに2人の選手が出場したため、ポールの輸送という大きな問題もクリアーしなければならなかった。シニア男子のトップ選手が使用するポールは長さで5m弱にもなるため、航空会社によっては規格外荷物となり、特別な手続きおよび費用が必要となる。今回、トランジット先のシャルルドゴール空港までは日本陸上競技連盟（以下、日本陸連）が提携している全日空であったため、特別な手続きは必要ではなかったが、その先のエアーフランスでは飛行機に積載できないとのことから陸路運送の手続きをとらざる得なかった。

３．選手村での生活

選手村は大型客船であった（写真1）。事前から様々な情報が流されていたが、選手村が船上というのは、あらゆる国際試合でも類を見ないものであり、実際に現地入りしてみないとわからないことばかりであった。

実際に生活をしてみると生活自体は想像以上に快適であり、すぐに慣れることができた。食事は非常に豪華かつ美味であり飽きることがなかった。さらにレストランが複数あるばかりでなくカフェも複数あり、コーヒーやスイーツも堪能することができるなど、過去になく快適な食生活を送ることができた（写真2）。居住スペースについては若干の狭さを感じたが、こちらについてもそれほど大きなストレスにはならず、さらに船内にはラウンジがいくつかあったため、そちらでくつろいでいる選手やスタッフも数多くみられた。しかし、窓がない部屋に割り当てられた選手の中には、閉鎖的な空間にストレスを感じた者もいたようであった。

その一方で、最も苦労したのが選手村内におけるトレーナー活動、いわゆるケアおよびコンディショニング活動をするためのスペース確保であった。これまでのユニバーシアードでは、トレーナーの宿泊部屋や、チーム内スタッフの共有スペースなどを活用してきた。しかしながら、今回は宿泊部屋が非常に狭いこと、さらにチーム内スタッフの共用スペースがないことから、やむを得ず解放されているラウンジの空きスペースなどを使って活動を行った（写真3）。それでも大会本部側から活動禁止の注意をうけることがあったため、毎日使用できる場所を探しながらのコンディショニング活動であった。その後、大会が進むにつれて帰国した他種目の選手が使っていた部屋が空いたことから、JOCから大会本部に交渉してもらい、空き部屋をコンディショニング部屋として使用することができるようになり、ストレスなく活動することができるようになった。

また、選手村の活動で苦労した点として、船内に入るまでに3回ものセキュリティチェックを通過しなければならない点もあげられた。特にトレーナーベッドなどの大きな荷物は直接持ち込むことができず、最初のセキュリティ時に別ルートを通してポーターへ運んでもらわねばならないなどの手間が必要であった。

こうした選手村での生活とは別の苦労を伴ったのが7名のアディショナルオフィシャルであった。今回、選手村に入村できる人数が限られるということから、アディショナルオフィシャルは選手村から徒歩で15～20分ほど離れた一般ホテルで生活することになった。朝食のみついていたが、昼食および夕食は街にでて食べなければならない上、毎日選手村まで荷物をもって往復しなければならないため、肉体的に大きなストレスとなった。特にトレーナーはベッドなどの重い荷物を運ばなければならないために苦労を強いられた。

そして、スタッフおよび選手ともに最も苦労したのが選手村と練習および試合会場までの移動である。例年、こうした国際大会においては交通規制がとられ、選手村からの移動はシャトルバスが手配されるなど、混乱が生じないように十分な対策がとられるものであるが、今回はそうした対策が全くといって良いほどとられていない、あるいは機能していない状態であった。交通関係のボランティアスタッフと運転手とのコミュニケーションも全くとれておらず、ボランティアに行き先を確認して乗車したとしても、全く違う場所に連れて行かれたり、練習が終わって選手村に帰ろうとしても迎えのバスが手配されておらず2時間以上も灼熱の路上で待たされるという状況が多発した。日本選手団本部からもこの問題については組織委員会に強く申し入れをしていただき、徐々に改善されていったものの、ついに最終日までスムースな移動がなされることはなかった。

また、例年と異なるもう一つの問題として、ウォーミングアップエリアと試合会場との距離が離れており、両者間においてバス移動を余儀なくされた点と、試合会場からウォーミングアップエリアへと戻ることができないという点である。そのため、コーチングスタッフやトレーナーは、どのタイミングで試合会場へ移動するのがベストなのか常に打ち合わせながら移動せざるを得なかった。なお、余談ではあるがこうした現地での様々な打ち合わせのために、陸上競技選手団は各スタッフにポケットWi-Fiを配布し、各自のスマートフォンにおいてコミュニケーションアプリであるLINEを使

用した。こうした工夫は数年前から実施しており、様々な問題解決に重宝している。

写真 1

写真 2

写真 3

4．気候

日中の平均最高気温は概ね 30℃を超えていたが、日本より湿度は低いため、高温多湿環境に慣れている我々日本人からすれば、紫外線対策および水分補給に注意しておけば、熱中症に悩まされるほどではなかった。大会期間中、天候の崩れもなく日中の暑さのみに注意しておけば大きな問題は生じなかった。

5．短距離・障害種目の試合経過と戦評

(1) 男子短距離・障害

男子 100m には、宮本大輔選手（東洋大学）とデーデーブルーノ選手（東海大学）が出場した。宮本選手は、ユース時代から国際大会の経験が豊富で、予選、準決勝と落ち着いたレース運びで決勝進出を果たし、決勝では惜しくもメダルには届かなかったものの、見事 7 位入賞を果たした。一方、デーデー選手は力を出し切れば決勝に残る力は十分にあったが、惜しくも準決勝で敗退となった。また、男子 200m には、山下潤選手（筑波大学）と染谷佳大選手（中央大学）が出場した。長身の山下選手にとっては不利となる内側のレーンにもかかわらず、2 大会連続の 4 位入賞（前大会は 7 位入賞）を果たした。染谷選手は、準決勝敗退に終わってしまい本人にとっては残念な結果であった。さらに、男子 400m には、河内光起選手（近畿大学）と北谷直輝選手（東海大学）が出場した。北谷選手は今大会陸上競技短距離種目のトップバッターで登場し、予選では組トップでの通過。また、河内選手も日本選手権 4 位の実力のまま予選、準決勝と上手いレース運びで決勝に進出し、河内選手は 6 位、北谷選手も 8 位入賞を果たした。

宮本、染谷、山下、デーデーのオーダーで臨んだ日本のお家芸とも言える 4 × 100mR では、プレッシャーをコーチ・選手共に感じながらではあるが、見事に金メダルを獲得し（写真 4）、選手の実力を改めて感じた。また、4 × 400mR では、河内、山下、北谷、豊田の 4 人全員が個人種目でファイナルに進出したメンバーで臨んだが、メダルに後一歩及ばず、4 位という結果は非常に悔しい結果となった。

男子 110mH には、泉谷駿介選手（順天堂大学）が出場した。予選 2 着（13 秒 64）、準決勝 2 着（13 秒 59）と難なく突破し、メダル獲得の期待のかかった決勝では、思い切りの良いスタートから優位にレースを展開し、見事銅メダルを獲得した（13 秒 49）。また、男子 400mH には、井上駆選手（順天堂大学）と豊田将樹選手（法政大学）が出場した。井上は予選 1 着（50 秒 88）で通過したが、準決勝は 5 着（50 秒 82）で惜しくも決勝進出はならなかった。一方、豊田は、予選 3 着（50 秒 67）、準決勝 2 着（49 秒 80）で順当に決勝へ進し、決勝では惜しくもメダル獲得はならなかったものの 49 秒 27 の好記録

で4位入賞を果たした。なお、レース後2位に入った南アフリカの選手が第3コーナーの曲線でハードルの外側をまたいだ可能性があったため、我々コーチングスタッフはTICに上訴を行ったが、ビデオエビデンスがクリアーではないという理由で却下され、豊田の繰り上がりでのメダル獲得にはならなかったのは非常に残念な結果であった。

写真4

(2) 女子短距離

女子100mには、湯浅佳那子選手（日本体育大学）と福田真衣選手（日本体育大学）が出場した。両選手とも現地入りしてから日に日に調子を上げることができたが、湯浅選手が予選4着（11秒92）、福田選手も予選4着（11秒99）でいずれも予選敗退となった。また、女子200mには、柳谷朋美選手（大阪成蹊大学）と広沢真愛選手（日本体育大学）が出場したが、柳谷選手が予選6着（24秒42）、広沢選手が予選5着（24秒93）といずれも予選敗退であった。広沢は春先からのアキレス腱周囲炎の影響で思うようなトレーニングが実施できていなかったこともあるが、日本の女子短距離選手は、まずは個の能力を引き上げるとともに、海外での大舞台で力を出し切れるための経験値を上げていくことが重要であると感じた。しかし、この4人（湯浅→福田→広沢→柳谷）で組んだ女子4×100mRでは、メダルの獲得こそならなかったものの、44秒91（今季日本ランキング2位）の記録で5位入賞を果たすことができた。また、当初出場は予定していなかったが、今回の代表メンバーの特性から4×400mRも十分に戦えるだろうという判断から、湯浅、広沢、柳谷に800mの塩見選手を加えたメンバーで4×400mRに挑んだ。例年の結果をみると十分に決勝進出、さらにはメダル獲得も狙えると思っていたが、今回はイタリア開催ということもあり、4×400mRの強いヨーロッパ諸国が参加しており、予選通過ラインが例年と比べものにもならないくら

表3　第30回ユニバーシアード競技大会（2019/ナポリ）日本代表選手　成績一覧

	氏名	所属	種目	予選				準決勝				決勝			備考
				日付	組	着順	記録	日付	組	着順	記録	日付	着順	記録	
男子	宮本　大輔	東洋大学	100m	7/9	5組	2着	10.41	7/9	2組	2着	10.37	7/9	7着	10.43	7位入賞
	デーデー　ブルーノ	東海大学	100m	7/9	4組	3着	10.42	7/9	1組	4着	10.5				準決勝敗退　全体11位
	染谷　佳大	中央大学	200m	7/10	1組	2着	21.2	7/11	2組	4着	21.09				準決勝敗退　全体11位
	山下　潤	筑波大学	200m	7/10	7組	1着	20.97	7/11	1組	2着	20.73	7/11	4着	20.58	4位入賞
	河内　光起	近畿大学	400m	7/8	5組	2着	46.67	7/9	1組	2着	46.05	7/10	6着	46.62	6位入賞
	北谷　直輝	東海大学	400m	7/8	1組	1着	47.55	7/9	2組	2着	46.57	7/10	8着	46.69	8位入賞
	館澤　亨次	東海大学	1500m	7/8	2組	6着	3.49.96								予選敗退　全体15位
			5000m	7/11	1組	1着	14.19.84					7/13	5着	14.16.63	5位入賞
	阿部　弘輝	明治大学	5000m												欠場
			10000m									7/9	2着	29.30.01	銀メダル
	西山　和弥	東洋大学	10000m									7/9	8着	30.10.65	8位入賞
	相澤　晃	東洋大学	ハーフマラソン									7/13	1着	1.05.15	金メダル
	中村　大聖	駒澤大学	ハーフマラソン									7/13	2着	1.05.27	銀メダル
	伊藤　達彦	東京国際大学	ハーフマラソン									7/13	3着	1.05.48	銅メダル
	泉谷　駿介	順天堂大学	110mH	7/11	4組	2着	13.64	7/12	2組	2着	13.59	7/12	3着	13.49	銅メダル
	豊田　将樹	法政大学	400mH	7/9	3組	1着	50.88	7/10	1組	2着	49.8	7/11	4着	49.27	4位入賞
	井上　駿	順天堂大学	400mH	7/9	4組	3着	50.67	7/10	2組	5着	50.82				準決勝敗退　全体12位
	阪口　竜平	東海大学	3000mSC	7/9	1組	1着	8.49.50					7/12	6着	8.41.64	6位入賞
	川野　将虎	東洋大学	20mW									7/12	2着	1.23.20	銀メダル
	池田　向希	東洋大学	20mW									7/12	1着	1.22.49	金メダル
	古賀　友太	明治大学	20mW									7/12	3着	1.23.35	銅メダル
	江島　雅紀	日本大学	棒高跳	7/10	A	1位	5m25					7/12	7位	5m21	7位入賞/予選通過5m25（12人）
	竹川　倖生	法政大学	棒高跳	7/10	B	4位	5m25					7/12	5位	5m31	5位入賞/予選通過5m25（12人）
	横岡　俊輝	日本大学	走幅跳	7/12	A	2位	7m76					7/13	1位	8m01	金メダル/予選全体3位通過
	津波　響樹	東洋大学	走幅跳	7/12	B	10位	7m43								予選敗退　第20位
	坂本　達哉	大阪体育大学	やり投	7/9	A	7位	71m27								予選敗退　13位
	長沼　元	国士舞大学	やり投	7/9	B	6位	73m66					7/11	7位	75m37	7位入賞/予選全体9位通過
	走順【宮本-染谷-山下-デーデー】		4×100mR	7/12	2組	1着	39.3					7/13	1着	38.92	金メダル
	予選【河内-山下-染谷-北谷】決勝【河内-山下-北谷-豊田】		4×400mR	7/12	3組	2着	3.06.74					7/13	4着	3.04.34	4位入賞
	3名【相澤、中村、伊藤】		ハーフマラソン団体									7/13	1位	3.16.30	金メダル
	上位3名【川野、池田、古賀】		20kmW団体									7/12	1位	4.09.44	金メダル
	氏名	所属	種目	1次予選				準決勝				決勝			備考
				日付	組	着順	記録	日付	組	着順	記録	日付	着順	記録	
女子	湯浅　佳那子	日本体育大学	100m	7/8	8組	4位	11.92								予選敗退　全体31位
	福田　真衣	日本体育大学	100m	7/8	7組	4位	11.99								予選敗退　全体35位
	柳谷　朋美	大阪成蹊大学	200m	7/10	4組	6着	24.42								予選敗退　全体30位
	広沢　真愛	日本体育大学	200m	7/10	5組	5着	24.93								予選敗退　全体41位
	塩見　綾乃	立命館大学	800m	7/8	3組	1着	2.06.77	7/9	1組	4着	2.03.73				準決勝敗退　全体11位
	和田　有菜	名城大学	1500m												欠場
			5000m	7/10	2組	3着	16.33.86					7/12	4着	15.56.94	4位入賞
	髙松　智美ムセンビ	名城大学	1500m												欠場
			5000m	7/10	1組	1着	16.19.61					7/12	7着	16.03.57	7位入賞
	関谷　夏希	大東文化大学	10000m									7/8	3着	34.05.84	銅メダル
	五島　莉乃	中央大学	10000m									7/8	2着	34.04.65	銀メダル
	鈴木　優花	大東文化大学	ハーフマラソン									7/13	1着	1.14.10	金メダル
	加世田　梨花	名城大学	ハーフマラソン									7/13	2着	1.14.32	銀メダル
	田川　友貴	松山大学	ハーフマラソン									7/13	3着	1.14.36	銅メダル
	髙良　彩花	筑波大学	走幅跳	7/8	B	5位	6m22					7/9	12位	6m10	予選10位通過
	都　菜々佳	九州共立大学	砲丸投	7/11	B	9位	15m44								予選敗退　全体13位
			円盤投	7/8	B	9位	50m53								予選敗退　全体16位
	齋藤　真希	東京体育大学	円盤投	7/8	A	9位	50m08								予選敗退　全体18位
	北口　檀花	日本大学	やり投	7/9	B	2位	57m91					7/10	2位	60m15	銀メダル/予選全体2位通過
	走順【湯浅-福田-広沢-柳谷】		4×100mR	7/12	2組	2着	45.08					7/13	5着	44.91	5位入賞
	走順【広沢-柳谷-湯浅-塩見】		4×400mR	7/12	1組	4着	3.36.67								予選敗退　全体10位
	3名【鈴木、加世田、田川】		ハーフマラソン団体									7/13	1位	3.43.18	金メダル

金メダル：8　銀メダル：6　銅メダル：5　入賞（第4位-第8位）：15

い上がり、残念ながら決勝進出はならなかった。

6．総評

本大会は、金メダル 8、銀メダル 6、銅メダル 5 という日本史上最高の成績を収めることができた（表 3）。本大会は、ヨーロッパ開催ということもあり、日本チームの苦戦が強いられることが予想されたが、選手たちは自身の力を非常によく発揮したと感じた。また、選手の頑張りはもちろんだが、情報共有や共通理解、共通認識など、スタッフ間の横の連携がとてもうまく機能していた。本大会は、競技運営面においてこれまでになく様々な問題が多発したが、そのような状況の中でもうまく対応していくことができたと感じる。中国、成都で開催される次回大会では、本大会を上回る成績を収めることができることを祈願し、ここに報告させて頂く。